



1 熊本市・城南町の概況

新市を構成する熊本市、城南町の概況は以下のとおりです。

【熊本市・城南町の概況】

出典：平成17年国勢調査報告書など

	熊 本 市	城 南 町
市章・町章		
面 積	286.81km ²	36.88km ²
	〈新市合計 323.69km ² 〉	
人 口	677,565人	19,641人
	〈新市合計 697,206人〉	
世 帯 数	272,847世帯	6,022世帯
	〈新市合計 278,869世帯〉	
一世帯当人員	2.48人/世帯	3.26人/世帯
	〈新 市 2.50人/世帯〉	
人 口 密 度	2,362.4人/km ²	532.6人/km ²
	〈新 市 2,153.9人/km ² 〉	
市制・町制施行	明治22年	昭和30年
市・町の花	肥後ツバキ	菊
市・町の木	イチヨウ	まき
市・町の鳥	シジュウカラ	—

(注) 熊本市の数値は、旧富合町を含む。

2 歴史

現在までつながる熊本市・城南町の歴史は、古く縄文時代まで遡ります。約5,000年前には、海が、熊本平野内陸部まで入り込んでいましたが、その海岸線沿いであった城南町阿高の黒橋や御領、熊本市沼山津などには貝塚が形成され、熊本平野一円を活動域とする文化が形成されました。また、奈良時代になると、熊本市黒髪から城南町隈庄まで西海道がほぼ直線で通り抜け、城南町の陳内廃寺出土の文様瓦と同種のものが、熊本市大江遺跡群からも出土するなど、そのつながりの深さがうかがえます。

16世紀末になると、肥後半国は緑川以北に加藤清正が、以南には小西行長が入国し、現在までつながる町並の基盤整備が始まります。現在の熊本市中心市街地にあたる城下町の形成も始まりました。

慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦い後、徳川家康の天下になると、加藤清正が肥後54万石の領主となり、慶長6年(1601年)からは、茶臼山に城を築き、慶長12年(1607年)に「隈本城」から「熊本城」に改めました。また、白川、緑川など多くの河川改修を行い、緑川においては、城南町北部地域に洪水調整施設として桑鶴塘、横塘を築いています。

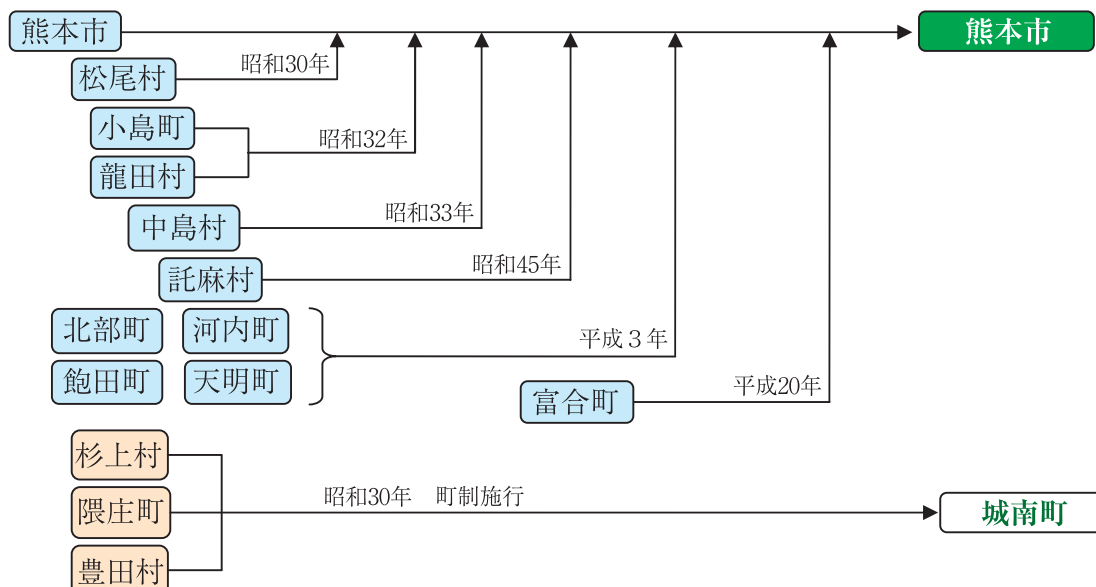
その後、清正の子忠広が寛永9年(1632年)改易され、細川忠利が肥後領主となり、以後、明治までの二百有余年もの間、細川家により治められてきました。当時の城南町は、杉島手永、廻江手永に分割されており、その一部は、熊本市富合町と同じ行政域にありました。

近代に入ると、明治10年の西南の役で、現在の熊本市街地の大部分が戦火に遭いましたが、直ちに復興し、明治22年に熊本市が誕生しました。市制施行当時、面積5.55km²、人口4万2千余人を数えるに過ぎませんでした。現在では、面積286.81km²、人口約68万人にまで発展し、名実ともに九州中央に位置する中核市として発展を続けています。また、城南町は、明治22年の町村制で、隈庄町、杉上村、豊田村の1町2村となり、この1町2村が昭和30年に町村合併促進法に基づき合併し城南町となりました。

このように、熊本市と城南町は歴史的にみると、はるか原始・古代から同一の文化圏を有し、中世・近世・近代と行政域を同じくした期間が長く、歴史的に強い結びつきがあったことがうかがえます。

【両市町の沿革（昭和以降）】

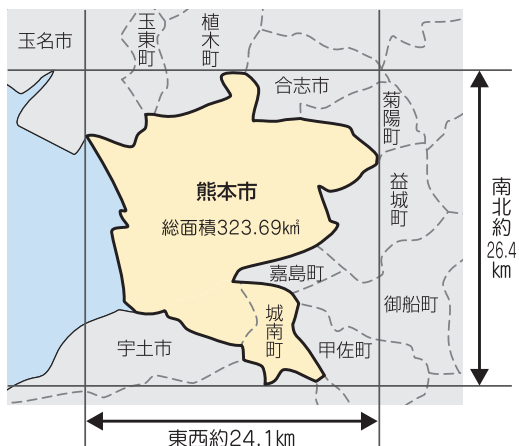
参考：平成20年熊本市町村要覧



3 位置・地勢

新市は熊本県中央部に位置し、有明海に注ぐ坪井川、白川、緑川の3水系の下流部に形成された、熊本平野の大部分を占めています。

西側には有明海に面した海岸線、北西側は金峰山地、北側は台地、東側は平野部、東南側は丘陵地、南側は木原山（通称：雁回山）を頂とする山系と、豊かな自然に四方を囲まれた地形となっています。



【新市の位置】

